

組織的調査研究活動推進事業

— 恩納村のオキナワモズク養殖 —

金城盛徳・勝俣垂生
当真 武・照屋 忠敬

1 調査目的

オキナワモズク養殖の振興

県下でオキナワモズク養殖が開始されたのは、昭和52年頃からであり、特に恩納村においては比較的長い海岸線とそれに面した広い海域は、モズク養殖に適した漁場となっていてモズクの養殖技術の導入に最も熱心な地域である。又同漁場とところせましと張られた養殖網を管理している漁業者の姿は、従来の養殖業に対する考え方を一変させるものがある。

モズク養殖に対する積極的な姿勢が、生産規模の拡大、養殖業者の増加となり、このことが養殖用種苗の確保、漁場の配分、他漁業との競合、赤土汚染による被害等現場での多くの問題を提起することとなり、他方このことは他の地域でも起りうる事が予想されるので、行政、試験研究機関と現場の恩納村及び漁協を含めてこれらの解決策について総合的に検討を行う必要がある。

2 調査内容

- (1) 調査期間 昭和54年4月～55年3月
- (2) 調査場所 恩納村
- (3) 調査方法

- ア. アンケート聞き取り調査
- イ. 現地での検討会

3 調査結果

調査の経過からわかってきたことは、(1)モズク種苗の保存及び種付け等については技術的にはほぼ解決されているが、作柄に地域差がみられるので今後漁場環境調査等を行い生育条件を把握し、土木技術等の導入による漁場の整備を図って行く必要がある。(2)モズク養殖漁場については、昭和53及び54年度に特定区画漁業権の設定がなされ、必要な面積を確保した。組合員への養殖場の割ふりは、海面を20m×100mに区分し、地先優先、実績を重視しつつ抽選で5年間の契約で行っている。又現在のところ他の漁業との競合は、表面化していないが今後は刺網漁業、追込網漁業、イカ洩き、ウニ漁業等に可能性がある。(3)陸上からの赤土流入は、モズク養殖に悪影響があり、県では土砂流出防止対策方針を定めてあるが、十分な成果はない。(4)モズクの販売については、漁協に集出荷しているが、全県的な豊漁と販売価格、等の問題で販売が円滑に行っていない。

4 今後の課題

モズク養殖の生産に対する技術的なものはほぼ解決されているが、漁業者の生産意欲に直接関係する流通体制の確立は、今後の緊急かつ重要な課題である。

なお、詳細は、昭和54～55年度組織的調査研究活動推進事業報告書に別冊としてまとめた。